

報告

グローバル人材に求められる発信力の養成と言語教育 ：母語と外国語教育の接点 (2017年度関東支部大会 シンポジウムI 報告)

勝又 美智雄 A



2017年6月17日、中央大学後楽園キャンパスにて開催された第4回関東支部大会において、午前10時15分から11時45分のシンポジウムIでは、上記のテーマで4人のシンポジストを迎えて議論した。

まず小野博氏は、工学博士、医学博士の経歴を背景に日本リメディアル教育学会と本学会を創設した実績を持ち、現在も福岡大学・昭和大学・中村学園で教鞭をとりながら、さまざまな大学の教員たちを組織して大学教育のあり方について共同研究を陣頭指揮してきた。こうした豊富な経験を背景に、以下の点を強調した。

① 「グローバル人材の育成」をスローガンに全国

A: 国際教養大学名誉教授

の小学校から大学まで「発信力」を養成する英語教育に熱心に取り組んでいるが、現実には過去10数年、ごく一部の進学校、先進的な大学以外では学生の英語力がかなり下がってきている。

- ② 全国各地の大学新入生の受験データを分析すると、日本語力と英語力は相関関係があり、特に日本語力が高い学生ほど英語力が高いことが判明した。地方の大学では「地元枠」で入学する学生が日本語力も英語力も中学生レベルにとどまっていて、大学教育についていけない学生を多く生んでいる。
- ③ 高い英語力を身につけさせるには、高校3年レベル以上の日本語力を持つことが先決である。

り、大学でもこうした日本語力をつける教育体制をつくる必要がある。

その問題提起を受けて、たなかよしこ氏（日本工業大学部准教授）は外資系企業で働き、言語科学を専門に、主に理系学生を相手に日本語力を高める教育に取り組んでいる経験から、以下を指摘した。

- ① 日常会話と仕事、とりわけ業務で必要な英語力は全く質的レベルが異なる。
- ② 論理的な思考力を高め、事物の説明に的確な概念操作ができるようするために米英の中學2,3年生の使う Science, Mathematics, Societyなどの教科書、教材を活用すると効果的だ。
- ③ 英語でも日本語でも長文読解で忍耐力を養い、特定テーマについて科学的調査の厳密な理解を深めることが言語理解力全体を高めることになる。

次に奥山則和氏（桐蔭学園グローバル教育センター長）は日本の大学で教員免許（地理）を得て卒業後にイギリスに渡り、現地の小学校で日本文化を教えた縁でロンドンの公立中学校教師をしながらロンドン大で修士号を取得し、さらに帰国後、中高の外国語教員の免許を取得したという異色の経歴のバイリンガル教師。その半生を振り返りながら、

- ① 日本の教育は知識の詰め込みに終始するのに対し、英国では「量ではなく質」、いかに優れた文章・古典的な作品をしっかりと味わえるかを重視する。
- ② 自分自身、英語力がついたことを実感したのは “Jurassic Park” (M. Crichton) の内容の面白さにかられて一気に読了したとき。知的好奇心を刺激されて、どんどん優れた本を読むことで英語力もその面白さを人に語る発信力も自然についてくる。
- ③ 日本で偏差値 55 以下の生徒は知的好奇心が弱く、薄い。それを高めるには本を読むことが楽しい、内容のあることを話すことが楽しいという「成功体験」をたくさん積ませることが一番ではないか。

などと語った。

4人目の Tim Hornjak 氏はカナダ出身の科学ジャーナリスト。過去12年間、東京に在住し、日本のロボット工学や遺伝子工学など科学技術分野を幅広く取材し、英字紙、英文雑誌に寄稿している。日本人と結婚し子供もでき、日本各地の学校現場で英語教育を視察・指導してきた体験から、

- ① 英語を学ぶための motivation を育てるが最も大切だが、現場教師たちにはその意識が薄く、テストの成績などばかり重視している。
- ② 英語を話す面白さを体感させるには、文法的な間違いなどは気にしない方がいいのだが、先生も生徒も「間違った表現をしない」ことを重視しすぎている。思い切り自由に話させるためには、もっと All-English Environment をつくる工夫が必要だ。
- ③ アニメでも漫画でも、サムライでも何でもいい、自分の興味のあることを外国人にわかりやすく、その魅力を伝える努力をすることが「発信力」をつくる出発点になる。

などと英語で解説した。

シンポジストたちの問題提起と、それに続く4人の間でのQ&A、さらに会場を埋めた聴衆とのやり取りを含めて、議論は活発に展開し、司会者として、もう少し時間がほしいと切実に思った。しかし全体を通して、この第1部シンポジウムのねらいである、「日本人が日本語で発信できること（内容）と英語の発信力との違いは何か、その落差はどうすれば埋められるのか」「英語の発信力はどうすれば身につけられるか」「現在の中學・高校・大学の英語教育の問題点は何か」について、4人がそれぞれの視点から自由・闊達に話してくれたことで、今回の支部大会のベースセッター役がきちんと果たせたのではないかと考えている。

受付日 2017年7月16日 受理日 2017年9月10日